

福島さん(高崎)大賞

群馬イノベーションアワード

15組、独創的プラン

起業家発掘プロジェクト「群馬イノベーションアワード」(GIA)2018(上毛新聞社主催、田中仁財団共催)のファイナルステージが1日、前橋市のヤマダグリーンドーム前橋で開かれた。最終審査に臨んだ15組が独創的な事業プランを発表。ビジネスプラン部門一般の部で、保育現場でリストバンドやカメラを使って子どもの健康状態などを一元管理するシステムを提案した「ARIGATO COMPANY」(高崎市)の福島直さん(41)が最高賞の大賞に輝いた。

6回目となる今回から一新したキヤッチフレーズは「群を抜け」。過去最多となる402件の応募が寄せられ、1次、2次審査を通過したファイナリストが登壇。新たな技術を活用して社会の課題解決につなげる製品やサービスをアピールし、慶応大の国領二郎教授ら6人が審査した。

ビジネスプラン部門では

高校生の部で高崎高2年の加部隆太さん(17)と吉岡奨悟さん(17)、大学生・専門学校生の部で中央農業大学校2年の武彩伽さん(23)、一般の部で三晃メンテクス(前橋市)の須永光さん(33)がそれぞれ入賞。スタートアップ部門はエpiteみやび(甘楽町)の田村雅美さん(36)、イノベーション部門は山名八幡宮(高崎市)の高井俊一郎さん(43)が入賞した。

大賞を受賞した福島直さんのプレゼンテーション＝ヤマダグリーンドーム前橋



表彰式後の交流会で、実行委員長を務めた田中仁・

ジンズ社長は「好きなことに邁進することが新しいものを切り開く原動力。GIAはそのプラットフォームになっている」と述べた。

会場では家具販売店チェーンのニトリホールディングス会長兼CEOの似鳥昭雄氏が「リーダーが育つ55の智慧」と題して特別講演

を行ったほか、クリエイターの作品や県内飲食店のブースが並ぶ「群馬イノベーションマーケット」が繰り

広げられた。

群馬イノベーションアワード

6回目を迎えた「群馬イノベーションアワード(GIA) 2018」。会場となった前橋市のヤマダグリーンドーム前橋には政財界関係者をはじめ、高校生ら大勢の観客が詰め掛けた。ステージで披露される独創的な事業プランに聴き入るとともに、ファイナリストが堂々と発表する姿を真剣な表情で見守った。

出場した同級生を応援していた市立太田高3年の宮本陸さんは「自分でもやりたいことを見つけて、いつかステージに立ちたい」と目を輝かせた。高崎商業高3年の中野渚さんは「高校生でも新しいことを考えて発表できるのはカッコいい」と同世代が堂々と発表する姿に刺激を受けた様子だった。

「今までで最もレベルが高いと感じた」と話すのは、3年連続でファイナルステージを観覧した共愛学園前橋国際大4年の下條七海さん。

交流会で歓談するセガサミーホールディングスの里見会長(左)とジンスの田中仁社長ら



新調されたランウエー型のステージ

政財界人から高校生 会場で見守る

起業の芽 刺激

「いつかステージに」

ステージには今回から、ファッションショーで見られるランウエーが設けられた。客席の中央へ延びる長さ9・6メートル、幅2・4メートル、高さ0・6メートルの舞台。アイデアを披露する発表者が一層輝けるよう、装い新たに行われた。

舞台中央にランウエー

臨場感増す

来場者も、より臨場感ある発表を体験できるようになった。同級生のプレゼンテーションを聴いた市立太田高3年の山下雅人さんは「間近だったので、堂々としていて格好良く見えた」と興奮気味に話した。

的。結果としてビジネスにつながれば素晴らしい」と拍手を送った。

セガサミーホールディングスの里見治会長グループCEOは「400組以上の応募があったのはすごい。こうした中から、やがて芽が必ず出てくるはずだ。群馬発の起業家がどんどん出てほしい」と期待した。

2013年の初回GIAにも参加したという角野然生関東経済産業局長は「応募する若者が増えるなど発

展が目覚ましく、感銘を受けた」とし、「地域が自らイノベーションを起こしていくのは地方創生に不可欠。国としてもこうした取り組みを支えていきたい」と述べた。

大沢正明知事は「開催内容は年ごとにグレードアップし、発表技術も上がっている。今後もさまざまな人に挑戦してもらい、さらなる発展を期待したい」と話した。



ファイナリストに拍手を送る高校生